

Title	體質人類學(西村眞次著, 早稲田大學出版部發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.162(622)- 163(623)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。その家より少し離れた處に男狹礮碑がある。

聳いぢめ——處女を青年の共有視した時代に、聳と云ふ一人の男性に獨占せられるとしたならば、聳としては、獨占に伴ふ相當の義務を負担すべきは勿論であると同時に、その村の若者が、その聳に對して、一種の嫉妬を起すのも又當然の歸結で、聳いぢめは、斯くして發生した社會的の一現象であると論じ、各地殘存の類例を擧げてこれを説明せられた。

遊行婦考——遊行婦の意義を因襲的に解釋すると、阿曾比女、宇加禮女と云ふ娼婦であるが、此の解釋は徹底しない見方であつて、決して其の實際を説明したものでないと言説せられ、(一)遊行婦が、その始めに有してゐた職業は何であつたか。(二)遊行婦は、何故に娼婦と見做さるゝまでに變化したのであるか。(三)遊行婦が娼婦と遷り變る其の経路はどうであつたか。此の三問題に就いて詳述せられ居る。猶ほ、交通不便な時代に於て、都會生活の皮肉に食ひ込んで陰陽道の思想が、案外迅速に地方へ傳播され且つそれが故實を失はないで、堅く保存されてゐたのは、采女の名の下に、遊部の職務を行ふた變則の遊行婦と、小町の名に隠れた、多數の遊行婦の漂泊とによるものと説明せられて居る。

物の周りを廻る土俗——或る物を目標として廻る俗信に關して各地の例を擧げて説明してある。序で乍ら、阿波志に、前記アマ塚に就いて「毎秋七月舞踏以敬邊墓、七周、其辭爾雅可聽。」と附記されあつたのを記憶して居る。

消えずの燈——太古發火法が容易でない時代に、火を作る困難と、火を神聖な物とした思想とが綜合されて、益々火を保存する

やうに努め、この理由で、消えずの燈が起つたのと云ふ。又更に天津日繼の眞の意義に論及し、神聖なる火を繼いだと解釋する事が、土俗の上から妥當であると説明して居る。

コホロギ橋と袖モギさん——各地のコホロギ橋の由來を訊れ、更に袖モギさんの正體を突留めた。コホロギ橋は、コロビ橋の轉訛で、橋上で轉倒すると、凶事があると云ふ俗信に起因したものであつて、これと全く同じ思想に屬するものが、袖モギさんで、これは、板橋で轉倒すると、來るべき凶事の代として、衣の片袖を截つて、直ちに棄てる俗習で、この信仰は、既に萬葉時代に存して居つた事などを説明された、興味津々たる研究である。

以上は、自分の車中讀了の後、腦裡に存する處を書き綴つたままである。要するに本書は各地の資料を多く列擧してあるので、參考になる處多く、一讀の價値ある良著として敢て紹介する。

(武田勝藏)

體質人類學

(西村眞次著 早稻田大學出版部發行)

最近のわが學界の喜ばしき一つの傾向は、人類學に對する興味が、ますます一般的にならうとしつゝあることである。けれど人類に對する正しき理解は、吾々の人生觀をして健全なるものとならしめ、吾々の生活意識をして明確ならしめ、その行動を正しきにみちびくからであつて、あらゆる學問が、人類及びその生活に關係を有するかぎり、人類についての知識は、あらゆる學問の研究の基本とならねばならない。しかし人類は、スフィンクスの謎

に於けるがごとく、實に解きがたく、不可思議なものである。萬物中の最も靈妙なるもの、最も驚嘆すべきものである。人類の出現と由來、その營む生活、その創造する文化、その身體の構造と機能、一つとして興味をそそらざるなく、重大ならざるものがない。が同時に、またその研究の、如何に困難であるかは言ふまでもない。

もちろん、わが學界に於いても、斯界の専門家が、すでに多くの尊い勞作をのこされ、殊に最近に於いて、小金井博士の『人類學研究』のごときは、單に博士の唯一の論文集であるばかりでなく、またわが學界の記念すべき好著である。その他佐喜眞興英氏の『女人政治考』も、原始社會の研究に對する警鐘でもあつたがしかしそれらの著述の多くは、人類學の一方面の研究にすぎなかつた。しかしながら學問の普及は、専門家の深き研究のみによつてとげられるものではない。吾々は、それらの専門的、或は特殊的研究の成果を採收して、その學問の全般的範圍を概説したる、綜合的著述を要求しなければならぬ。この意味に於いて、こゝに紹介せんとする西村教授の『體質人類學』は、當然吾々が、その出現を期待しなければならなかつたところのものである。

本書は、かつて本誌上に紹介したる同教授の『文化人類學』の姉妹書であつて、まづその緒論に於いて、文化人類學と、體質人類學との區別をのべて、前者が社會人としての人類を、後者は自然人としての人類を取扱ふものであるとなし、さうして、倫敦大學の人類學研究室で發展した人類學の分類法に從つて、體質人類學を動物學的、化石學的、生理學的、心理學的、人種學的の五方

面から考察し、人類が匍行から直立に進化し、その結果として上肢二本の自由をきたし、腦髓の一大進化を見、他のあらゆる動物から區別される状態にまで發達したることを、他の動物との比較や、人類自身の遺物から立證し、最後に人類體質の將來についてのべられた。教授自らその序文に斷つてゐることく、本書は、主として『綜合の材料及び主張の骨子を、學界の定説として認められてゐる諸名著から採擇』してなれるものであり、從つて教授自身の見解をあまりうかがうことはできないけれども、しかし人類學概論としては、わが國に於いて始めてみるところのものであり、斯學の普及には、最もよき參考書であつて、吾々は教授の努力を多としなければならぬ。(松本芳夫)

江戸時代の男女關係

(田中香羅著
黎明社發行)

人生の暗黒面の觀察と研究とに興味を持たれる著者は、江戸時代に於ける男女關係の暗黒面に着目し、糜爛しきつた江戸世相の一縮圖として、それを描寫したのが本書である。記す迄も無く、江戸時代に於ける兩性關係には、今日より觀て異樣變態なる事實が多く、本書は、その大要を説述するに務められた興味あるものである。次に讀者の參考迄に内容の一端を紹介して置く。

將軍大名の閨門——御家の長久御子孫繁昌といふ好口實は、將軍や、大名に、一夫多妻の習慣を持續せしめた唯一の原因である事を述べ、その荒淫放縱の生活の狀、閨門に於ける停年制、並に迷信、或は其の他の事情によりて行はれたる産兒制限等に就いて述